

論文題目：児童の思考力に関連する学習行動と動機づけについての研究
—課題解決的な学習を学びの充実につなげるために—

専攻 人間発達教育専攻
コース 教育コミュニケーションコース
学籍番号 m20015k
氏名 南山晃生

■問題と目的

平成19年度(2007年度)から全国学力・学習状況調査が始まった。この調査は、全国の小学6年生と中学3年生の全児童・生徒を対象として毎年実施され、現在も継続されている。

2007年度における箕面市の結果は、全国との関係において一定程度高い状態であったが、「自ら学ぶ態度」、「自分の考えを書く力」、「学習したことを活用する力」など、これからの子どもたちに求められている学力に課題があることが明らかになった。箕面市は、これらの課題を解決するため、全国調査で常に上位の成績である秋田県の由利本荘市の学校体制や授業に学び、すべての教員が共通理解しての共通実践が進められるよう『箕面の授業の基本』を作成した。ここでめざしている授業は、問題解決力の育成をめざした課題解決的な学習であり、これは問題解決学習の一形態である。

本研究では、箕面市による思考力の育成をめざした「課題解決的な学習」への取り組みに注目する。第1章では問題の所在を明らかにする。第2章では学びの充実を実現するための箕面市の取り組みについて検討する。第3章では、教育を受ける子どもの側の要因として、調査の分析・考察を行う。第4章では、3章までを総括し、総合考察を行う。それらを通して、子どもの学びの充実につながるような教育的取り組みについて考察を深めるこ

とが本研究の目的である。

■学びの充実のための教育側の取り組み

箕面市では、市独自の市内の全公立小中学生を対象に「箕面子どもステップアップ調査」を行っている。一人ひとりの子について、思考力がどのように経年変化しているか確認できるなど多面的に思考力の状況について、把握することができる。また、秋田県由利本荘市の視察を行い、学校体制や授業づくりの方法を学んだ。各校では、指導方法を統一し、学校として指導の継続性・一貫性を確保している。これらの取り組みで子どもたちの学びが充実する環境を創っている。

■学びの充実のための子ども側の要因

教育的取り組みとしてできることは、教育環境を整備することまでである。そこでどのように学びを進めるかは、子どもの側の要因である。子ども側の要因として動機づけについて取り上げることとした。また、授業や授業外において子ども達が様々な学習行動を行っていることにも着目することとした。

子どもたちの学習行動が思考力とどのように関連するのかを明らかにすること、子どもたちの動機づけが思考力とどのように関連するのかを明らかにすることを目的とした調査を行った。調査対象は、授業改善で課題解決的な学習に全市で取り組んでいる箕面市の小学校6年生242名であった。

調査内容は以下のとおりであった。(1)動機づけ尺度：西村ら(2011)が作成した自律的

学習動機尺度 20 項目。4 件法。外的調整，取り入れ調整，同一化調整，内的調整の 4 つの下位尺度からなる。(2)思考力・表現力：寺島ら（2013）のリストをもとにした 15 項目。4 件法。(3)学習行動の項目；課題解決的な学習で求められる学習行動や文部科学省が示した「主体的，対話的で深い学び」の解説を参考に，授業や授業外でみられる学習行動から，新たに作成した。授業内の項目 24 項目，授業外の項目 19 項目の計 43 項目。4 件法。

■調査結果

学習行動の項目は，因子分析の結果，「発表・説明」，「聞く・確かめる」，「教わる」，「調べる」，「やりとげる」，「活かす」の 6 つの下位尺度に分けられた。それらの平均値を比較すると，「聞く・確かめる」が最も高く，「調べる」が最も低かった。また，思考力は，学習行動のいずれの下位尺度とも正の相関があった。中でも「発表・説明」，「聞く・確かめる」，「やりとげる」とは中程度以上の相関があった。

思考力と動機づけの関係では，同一化調整，内的調整のいずれとも，正の相関があった。外的調整は，思考力とは有意な相関がなかった。取り入れ調整は，調整スタイルは外的であるが，思考力との相関があった。内的になるほど思考力との相関は強くなっていた。

学習行動と動機づけとの関連については，外的調整はいずれの学習行動との相関は有意ではなく，内的調整，同一化調整，取り入れ調整はすべての学習行動と有意な正の相関にあった。この 3 つの調整スタイルでは，内的調整と学習行動との相関が最も強く，同一化調整，取り入れ調整の順にその関係は弱くなっていた。ただし「教わる」について，内的調整は，同一化調整より弱い相関であった。また，それら 3 つの調整スタイル

すべてにおいて，学習行動の下位尺度の中では，「やりとげる」との相関が最も強かった。

動機づけについては，クラスター分析によるタイプを抽出したところ，4 つの調整スタイルがすべて平均値以下であった低動機づけ群，外的調整が有意に高い統制的動機づけ群，内的調整と自律的調整が平均値以上である自律的動機づけ群，すべての調整スタイルが平均値以上である高動機づけ群の 4 つの群に分けることができた。それぞれ 42 人，65 人，61 人，62 人であり，学級に各タイプの者がそれぞれ同じぐらいの割合で存在することが明らかになった。

■考察とまとめ

本研究では，「やりとげる」学習行動が思考力と正の有意な関係にあることが分かった。学校で当たり前のように取り組まれていることの中にも思考力育成につながるようなことのあるようであった。また，「発表・相談」，「聞く・確かめる」の学習行動も思考力との関連が強かったことから，それらの行動が相互に行われる話し合いが思考力育成に有効であると考えられた。

■今後の課題

思考力育成にとって話し合いが有効であることが分かった。本研究で求められる学習方法として触れたが，そのような学習方法を課題解決的な学習に取り入れることで学びの充実につながることを考えられる。実際に授業で取り組むためには，それらをどのように課題解決的な学習に取り入れるかが今後の検討課題である。授業づくりを進める中で工夫していくことが求められる。

主任指導教員 中間玲子

指導教員 中間玲子